

詩人M・イクバールの描いたムスリム国家像について

初野雅彦

1. イクバールの政界進出と彼の政治理念

イクバールは1926年のパンジャープ州議会の選挙に当選し、この年から政治活動に身を投じることになる。以後、1938年4月21日に亡くなるまで凡そ12年間、当時のインドの政治の舞台で活動することになる。彼の基本的な政治理念はインドに居住するいかなる少数民族であれ、彼ら固有の宗教、文化、伝統、風俗習慣、言語は「基本的権利」として保護されなければならないという考え方である。彼はこの政治理念にたって、ヒンドゥー教徒に比べて数の上で圧倒的に少数であるイスラーム教徒を民族と位置付け、彼らの宗教、文化、伝統、言語はヒンドゥー教徒のそれとは異質で、独自に保護されなければならないと主張し続けたのである。この政治理念がパーキスタンでは「二民族」論と位置付けられ、パーキスタン建国運動を支える力と考えられている。その具体的な提唱が1930年12月29日にアラーハーバードで開催されたムスリム連盟年次総会での彼の「議長演説」である。

2. 1930年のアラーハーバードでの「議長演説」

ムスリム連盟年次総会での演説の中の一説に『個人的に、私はパンジャープ、北西辺境州、スィンド、パルーチスターンが一緒になって、単一国家になることを望んでいる。イギリス帝国内の自治であれ、帝国の外であれ、北西インドにムスリム国家を建国することが北西インドに暮らすムスリムの行き着く最終運命のように思われる。』という箇所がある。英文で書かれた演説で用いられている言葉はStateである。彼はコミュニズムを前向きにとらえて、インドに居住するムスリムをひとつの「民族」として認め、イギリス帝国内にムスリム「国家」を作ることがインドを外部的からの侵略を守ることにともつながり、このことがインド国内に力の均衡を保ち、結果として、インド国内に調和と均衡が維持できると考えるのである。最後に、彼は『ムスリムはインドの中にムスリム「国家」を要求

するが、この要求は完全に正当なものである。』と主張するである。イクバールは演説の中で、『イギリス帝国内に留まるにせよ』或は、『イギリス帝国からの離脱であれ』と表現をしながら、その一方で、『イギリス帝国内に』と断言するところに彼のムスリム「国家」像に曖昧さが指摘できる。

3. 「議長演説」の反響

イクバールの演説に対して、ムスリム連盟の指導者を含むムスリム指導者はほとんど沈黙を守っている。その理由として、三つの要因が考えられる。その一つの要因は第一次ロンドン円卓会議(1930年11月12日～1931年1月19日)の開催中という時期の問題とイクバールの立場があげられる。ロンドン円卓会議の開催中であつたために、ムスリム連盟の指導者を含むムスリム指導者はロンドンに滞在していたのである。この期間、イクバールはムスリム連盟の議長ということではあつたが、所詮は暫定議長の役を仰せ付かつたに過ぎないのである。その二つの要因は「議長演説」が既に2年前に、ネルー委員会に提出されたものであつた。ネルー委員会はイクバールの提案を審議したものの、『醜い形のインドをつくる。』として最終的に拒否したのである。こうした経緯から、ムスリム指導者はイクバールの演説に新鮮さを見いだすこともしなかつたし、1931年9月から始まる第二次ロンドン円卓会議を控えてイクバールの提案を巡ってヒンドゥー教徒の指導者と事を構えなくなつたと考える。その三つの要因として、イクバールの提案にはベンガルのみならず、ハイデラバードやポパールなどのムスリム藩王国の将来について言及されていなかつたことである。一方、イクバールの演説に鋭い批判を加えた人物がイギリス人エドワード・トンプソン(Edward Thompson)である。インド在住の官吏であつた彼はイクバールの演説を「汎イスラム陰謀」と批判したのである。これに対して、第二次ロンドン円卓会議に出席のためロンドンに滞在していたイクバールは1931年10月に『私はイギリス帝国から離脱してムスリムの国をつくらうという要求など掲げていないのである。インドの運命を形成しつつある力強い勢力の行く末の結果を推量したまでのことである。』と答えている。トンプソンはイクバールの演説の State を文字通り、「国家」と読み取り、その本来の意味を理解するところまでには至っていなかつたのである。

4. イクバールの「国家」(State)の意味

イクバールの提唱した「国家」の意味を理解する糸口はネルー委員会とロンド

ン円卓会議とイクバールとの関わりにあると考える。前に触れたように、イクバールは「議長演説」をネルー委員会に既に提出しているのである。この委員会は単独の中央政府の維持を前提に、中央及び、ムスリムが少数である州を除いては議席の保留は認めず、然も、分離選挙制を認めないという基本方針を貫いていた。彼はこの委員会の基本方針を熟知していたはずである。仮に、彼の「議長演説」の骨子が端から、ムスリム国家の建国を要求するものであったならば、委員会は彼の持ち込んだ提案を審議せず即座にはねつけたに違いない。しかし、委員会は現に彼の提案を審議し、四つの州を一つに統合する案は『醜い形のインドをかたちづくる』という理由で拒否したのである。つまり、イクバールはネルー委員会に四つの州からなる「単一ムスリム多住地帯」の構想と彼らの生存権と自治を求める要求をしたにすぎないのである。イクバールは第二次ロンドン円卓会議からムスリム代表団の一員として出席する。この代表団はムスリム連盟、全インドムスリム会議、ユニオニスト党などのムスリム諸機関の代表から成り立っていた。会議に参加する代表団の基本方針はイギリスとヒンドゥー教徒との対峙ではなく、協調と統制の精神で臨み、ムスリムの生存権と州の自治を認めさせることにあった。ムスリム代表団の代表格で、かつて、サイモン委員会の受け入れを巡って反対の立場を示したジンナーと対立し、ムスリム連盟を分裂させたムハマド・シャフィー（Sir Muhammad Shafi）はイクバールの「議長演説」に触れて『インドムスリムは分離を望まないし、それを支持もしない。』と述べている。このことから、第二次円卓会議に出席したムスリム代表団のイクバールの「議長演説」の受け止め方が明確に読み取れるのである。仮に、イクバールがムスリム国家の建国を要求したとするならば、彼は代表団の一員に加えてもらえなかっただろう。

こうした経緯に加えて、イクバールは演説の中で協調と統一という言葉を使っているものの、決して、分離や独立という言葉は用いていないのである。彼はパンジャブ、北西辺境州、シンド、バルチスターンの四つのムスリム多数居住州をひとつにまとめて、一つのUnit、ウルドゥー語の Riyasat をつくる提案をしたに他ならないのである。彼の描いた所謂「国家」像とは「国家的レベル」ではなくして、Unit という「地域的レベル」にたったインド・ムスリムの解放構想に過ぎなかったのである。

〈キーワード〉 二民族論者、建国指導者、東洋の詩人

（日本放送協会職員）